

417) 居眠り

いろんな居眠りがあるものですが、こんな不運な居眠りは始めてのことです。ある12月の金曜日の夜、忘年会のほろ酔い気分で、何とか最終バスに乗り込んだところまでは極めてラッキーだったのでありますが、疲れていたのと酔いが回ったので、いつのまにか居眠りしてしまいました。バスは当然我が家の前も通ったのでありましようが、その頃はもう白河夜船というやつでして、バスはそのまま走り続けて終点まで行ったのでありますが、その頃は爆睡の最中、運転手のアナウンスもエンジンの音も耳に入らなかったようでした。しかしオシッコがしたくなって目が覚めると、どうしてか真暗闇で、静まり返っている。よくよく周囲を観察してみると、我輩を乗せたままバスは車庫の中に入ってしまったらしい。ところがバスは普通の車と違って、どうも中から鍵を開けることができないらしい。時計を見ると午前3時を少し過ぎたところである。ウームどうしよう。叫んだところで誰も来てはくれない。あ～、それにしてもオシッコが漏っちやうよ～。困ったな～。そうさっきジュースの空缶が一つ前の座席の下に置いてあったっけ。それを探そう。手探りで缶を探すと、あったあった。これにオシッコをしよう。それにしてもウンコがしたくなった時にはどうしたらいいんだ。そう考えたらもう眠ることなんてできない。バスの中を前から後ろに、後ろから前に歩き回って、6時を過ぎた頃になって、やっと始業点検に来た係の人に救出されたのでありましたが、あ～寒かった。真冬だったら凍えるところでありやした。居眠りも場所と時刻をわきまえなクッチャ。